

潜伏キリシタン・カトリックのみる自宗教と異国 (江戸後期・明治初期)

ノゲラ ラモス・マルタン*

禁教令・排耶書において、キリシタン・カトリックは日本の慣習・信仰を乱す異国の宗教として扱われていた。19世紀のヨーロッパによるアジアの植民地化で、そうした「異国の宗教」という見解が中国・韓国・東南アジアにおいても広まり、カトリック信徒はたびたび「国の敵」として見なされていたのである。しかしカトリック信徒自身がどのように自分の信仰をみていたのかに関して、実は、従来の研究ではほとんど取り上げられた事のない課題であった。土着ではない信仰としてみていたのだろうか。

本稿は、この課題について近世後期から明治初期にかけて日本のカトリック・潜伏キリシタンを対象とする。

禁教政策により、カトリックの司祭・宣教師が徐々にいなくなるなか、信仰を放棄するカトリックは多くいた。しかし、一部は表面上は仏教徒となり、密にカトリック信仰を守ろうとしていた。このカトリックが潜伏キリシタンと呼ばれている。17世紀中期-1865年の間、中世後期・近世初期のカトリックの子孫の一部は潜伏形態のまま信仰活動を維持する。

幕末期、パリ外国宣教会士が来日し、1865年長崎の大浦天主堂でプチジャンという宣教師は潜伏キリシタンを発見することとなった。それ以来、潜伏キリシタンの中に改宗運動が開始されたのだが、浦上四番崩れが発生したことにより各地で取締・弾圧が始まった。明治6年以降は禁教高札が

撤廃され、カトリックを黙認する時代となる。ただし、すべての潜伏キリシタンがカトリックとなったわけではなく、その多くは宣教師を認めず、カトリック信徒と潜伏キリシタンが共存していた。

本稿では4つの観点から、1865年の宣教師との接触によりカトリックとなった潜伏キリシタンの信仰意識の変化について述べていく。

1. 潜伏キリシタンの多様性について

潜伏キリシタンの中には、4つの系統が存在した¹。外海・浦上系、生月・平戸系、天草系、と今村系（現在の福岡県、大刀洗町にあたる）である。

外海・浦上系の潜伏キリシタンの組織は外海・浦上・長崎半島・五島列島・黒島・大島・九州に面する平戸・馬渡島の地域にあった。このように分散した地域にあったのは、18世紀後期以降、外海・浦上地域の潜伏キリシタンが人口過剰などにより土地を求め広域的に移住したことによる。最初に、カトリックに改宗したのは主にこの外海・浦上系の潜伏キリシタンである。

また、生月と生月に面する平戸の潜伏キリシタンの村落には信仰・慣習が類似しているため、その地域の潜伏キリシタンを同じ系統とされ、平戸・生月系と呼ばれている（宣教師によると、明治初期生月に1万人の潜伏キリシタンがいた）。

天草の潜伏キリシタンは資料上、下島の西に組織され、大江・崎津・高浜・今富には5000人いた。長崎から100キロ程度離れた久留米藩の村落である今村の周辺にも潜伏キリシタンがいた（～1500

*パリ・ディドロ大学

人)。

このような4つの系統については、1866年1月、宣教師が初めて潜伏キリシタンの多様性を指摘している。プチジャンの報告では、潜伏キリシタンの間では少しの差から(祈りの仕方・小齋の日など)異宗教と認識していたようだ。

また、平戸島には、パテレン宗とキリシタン宗の潜伏キリシタンが同じ村に住んでいるところもあった。パテレン宗は生月・平戸に住み、キリシタン宗と違い宣教師と係わろうとしなかった。プチジャンの様々な報告からお互いの仲はわかったことが読み取れる²。このキリシタン宗・パテレン宗などという呼称の存在は潜伏キリシタンの組織意識を端的に示している。

それぞれの潜伏キリシタンは自らの信仰・慣習が、自分の村だけのものでなく、さらに広域的なものであると意識していた。たとえば、外海・浦上系の潜伏キリシタンの場合、100キロ程度離れた五島あたりでも同じ信仰だと意識していたのである。

外海・浦上系の潜伏キリシタンと天草系・今村系の関係についてほとんど何も知られていないが、天草・五島・外海・長崎半島・平戸の潜伏キリシタンの多くは漁師であり、同じ地域で漁業活動を行っていたため、ある程度はお互いの存在を知っていたことが宣教師の資料からうかがえる³。

2. 宣教師再渡来以前の潜伏キリシタンの海外意識

もっとも情報が存在するのは外海・浦上系の潜伏キリシタン村落である。長崎の近くにある(天領)浦上は4回も為政者による取り調べの対象となっている。これを、いわゆる浦上の崩れという。浦上一番崩れ(1790年-1796年)、浦上二番崩れ(1842年)浦上三番崩れ(1856年-1860年)では、村民はカトリックとしてではなく、警戒すべき「異宗」として取り扱われる。浦上四番崩れ(1867

年-1873年)のさいは、村民がカトリックとなっていたために、弾圧の対象となった。

近世後期の為政者は(幕府・藩)異端的宗教活動を警戒している背景で、潜伏キリシタンを対象とする取り調べを行った。浦上三番崩れのさいに長崎奉行とその役人が作成した報告は、この潜伏キリシタンの組織と信仰について様々なことを教えてくれる。

2.1. 潜伏キリシタン信仰の起源について―浦上三番崩れを中心に

この安政3年(1856年)に開始された取り調べの経緯は不明であるが、慶応3年(1867年)の史料によれば、三番崩れの原因について、長崎代官は間接的に浦上村民の宗教と外国人の来日を結びつけて報告しているが⁴、村民は自らの宗教はキリスト教でなく、先祖の慣習だと主張している。その結果、浦上の潜伏キリシタンの刑罰は軽かった。

取り調べの報告には、数カ所に村民の信仰の異国性が指摘されている。特に、書物や像はとても異様であるようにみえたため、長崎の邪宗門の改め役僧侶に見せていた。たとえば、報告の朱書には次の様に書かれている。

「ジゾウスと唱へ候は和漢不知人物体に相見邪仏にては無之様に被存、日練書物の儀は蛮語体の文も相交り、悉く難解好事の者怪敷様書成候哉にて……右は往古切支丹修行の者渡来致候土地故古来の遺風自然相残り種々異様の事とも申伝⁵」

為政者は近世初期の「切支丹」と村民の信仰の関係は理解していたが、事を大きくしないために、彼らの古い慣習への愛着の方を強調している。最終的に、長崎奉行はいろいろな証拠があるにもかかわらず、浦上の村民が「切支丹」でなく、怪しい信仰(異宗)だと幕府に報告した。おそらく、長崎奉行の目的は村民の信仰が秩序を乱す一因になりうるかどうかを確認することだけであったのであろう。それに対して、浦上の潜伏キリシタン

も自らの信仰の起源について邪宗・切支丹でなく先祖から受け継いだことのみ強く主張している⁶。

2.2 『天地始之事』における潜伏キリシタンの海外意識

潜伏キリシタンは自らの信仰の起原について語る資料として『天地始之事』という資料が残っている。主に旧・新約聖書のエピソードからなっている書物で、『天地始之事』は創世記・アダムとイヴの墮落・マリアとイエズスの生涯・黙示録などなどが語られている。その上で、民間伝承と日本の信仰（神仏）の影響もかなり強く、キリスト教の概念が仏教の用語で説明されている箇所もある。この書物の作成過程に関しては不明な点が多いのだが、聖書のエピソードを語る書物がこの『天地始之事』以外には残っていない。近世初期以降伝承されてきた伝説に基づいて作成されたものといえる。そのため、潜伏キリシタンの信仰を分析するのにとても貴重な資料となる。

今のところ、外海・浦上系の村落でのみ『天地始之事』が見つかっており、今村・天草・生月などにはこのような資料は見つからない。外海・浦上系である多くの改宗者は、『天地始之事』の内容を知っていたといえるだろう。作成年は不明だが、もっとも古い写本は文政10年にある(1827年)。

次に、潜伏キリシタン信仰の起原についてはどのように述べられているのかをみる。

イエズスとその母マリアという新約の人物は『天地始之事』にも登場する。マリアとイエズスは明らかに日本ではなく異国の舞台で活動している。話の最初に、マリアは「ろそん」(ルソンか)王国の十二歳の少女とされている。そして、ロソン国王はとてもきれいなマリアを嫁に迎えようとする⁷。国王は自分の宝を見せてマリアを説得しようとするが、マリアは来世にしか興味がなく、現世の宝の空しさを強調するのだ。マリアは奇跡を起こすことで、デウス(神様)に庇護されてい

ることを国王に証明する。たとえば、真夏に雪を降らすなどだ。これをみて、国王はマリアを嫁にすることを諦めた。

そのすぐあと、聖書と同じように、大天使ガブリエルはマリアにイエズスの受胎を告知する。父母はマリアの妊娠を知り怒り、彼女を家から追放する。マリアは逃げ出し、さまざまな困難に遭いながら「ベレン」の国(ベツレヘム)に到着する。マリアがイエズスを出産してから、キリスト降誕を祝うために三博士がやってくる。マタイ福音では博士の人数と出身地は不明なのだが、『天地始之事』では次のようにかかれている。

「しばらくありて、つるこの国の帝王めんと、めしこの国の帝王がすばる、ふらんこの帝王ばうとざる」

なぜ潜伏キリシタンがそれらの国を選んだのかは不明である。「ベレン」の国王は、デウスの息子の誕生を知ると、イエズスを殺害しようと仕向けた。マリアは三博士からこれを聞き、イエズスと共に逃亡することにした。そして、バウチスモ川(ポルトガル語では洗礼の意味)という大川に到着したイエズスは、バプテスマのヨハネによりそこで洗礼を受ける。

このように『天地始之事』には実在の地名と架空の地名が混在している。信仰の用語が地名になっているのはバウチスモだけでなく、アベマリアのアベも川であると書かれている。

洗礼を受けたイエズスは、その後学十らという浄土宗の僧侶と会う。自らの宗教の優越を見せ合い、学十らが洗礼を受けることとなりイエズスの弟子となる。ベレンの国王によってまだ追われていたイエズスは「ろうま」の国に逃げる。

新約聖書では、イエズスはローマには行ったことがない。しかし、近世初期の宣教師はローマとのやり取りが多かったため、潜伏キリシタンの先祖がローマについてよく耳にしていたのは確かである。『天地始之事』では「ろうまの国」はイエズスが信仰を広めた国として重要である。

そして「ろうま」の国に逃げたイエズスは、結局弟子のユダによってベレンの国王に売られてしまう。ベレンの軍隊がローマに送られ、イエズスを逮捕し、彼を十字架にかけてしまう。死去後、イエズスは地上に戻って、ローマの「さんたえきれんじゃ」（聖なる教会）にてパッパ（教皇）という弟子に教理を教えている。

したがって、『天地始之事』にて、潜伏キリシタンの信仰が異国に由来するということが明記されている。

3. 宣教師の「信徒発見」をめぐる考察

3.1. 潜伏キリシタンの伝説と宣教師の来日

従来の研究では、あまり注目されなかった要素ではあるが、最初にフランス人宣教師と接触した潜伏キリシタンは宣教師の出身地に興味をもっていた。時には、潜伏キリシタンは直接に『天地始之事』の内容と宣教師の返事を比較する事例もある。

宣教師の報告には、潜伏キリシタンとの会話が詳細に多く記録されている。

二つの一節をみる。一つ目は1865年5月にあった会話だ。長崎の近くにある神ノ島出身のペトロという潜伏キリシタンは大浦天主堂に行く。ペトロはプチジャンに周辺の潜伏キリシタン組織と祈りについて様々な情報を伝えてから、ローマ王国の大王（*le grand chef du royaume de Rome*）のことにふれる⁸。『天地始之事』においては、イエズス自身ローマの「和尚」であり、ローマの国王の存在について何も書かれていない。パッパについては、イエズスの「弟子頭」と書かれている。そのため、その宣教師はおそらくペトロの言いたかったことは理解できていなかったであろう。それでも、ペトロにとって自分の村落にて数世代前から伝承されてきた話を知っている外国人と接触すること自体が思いも寄らないことであったのである。

数ヶ月後、1865年9月に、プチジャンは外海地方の出津に赴く。そこでも、潜伏キリシタンはローマと彼の出身地について質問している。そして、この村民たちがはつきりと宣教師とローマ・パッパの関係を明らかにしようとした。以下二つ目の節である。

「いろいろな質問の中に、特筆しないとイケないのはこの三つの質問があった。『あなたの王国とローマ王国は同じ心ですか？ローマ王国の大王に送られましたか？仕事の仲間〔宣教師〕がまた来ますか？』私は肯定の返事をしたので、かれはとても喜んでいたようである。強い関心で教皇の名前と年齢を私に聞いた⁹。」

これらのことから、宣教師との接触により、潜伏キリシタンの信仰認識が変わってきたといえるのではないだろうか。1865年以前、『天地始之事』にて描かれている世界は架空のことであったが、宣教師の来日で、ある程度、『天地始之事』の世界が現実になってきたのであろう。

3.2. 先祖信仰と宣教師の教理

1867年4月に、浦上の最初のカトリックは長崎奉行・代官に菩提寺との関係を断って、カトリック教会への所属を表明した。

「フランス寺教化の様子承候処、先祖伝来の儀と符合仕候に付、別て信仰仕¹⁰。」

カトリック宣教師を認めたということだ。その理由としては先祖の伝承とカトリック教理の繋がりを強調している。

その後、他の史料でも宣教師と先祖の教理の関係が改宗者により、たびたび指摘されている。通常、潜伏キリシタンと宣教師の接触を容易にするのは形態上の要素が大切だ。彼らは大浦天主堂の十字架・聖母マリア像をみることで、自らの信仰と宣教師との関係を理解した。多くの潜伏キリシタンにとってカトリックへの所属は改宗ではないとしている。先祖の信仰との連続性を強く感じているのである。したがって、カトリックとなるの

は異国の宗教を選ぶことでなく、逆に先祖の残した信仰の本来に戻ることでありと考えている。長崎代官に出頭したある浦上のカトリックは宣教師の教理を次のように紹介する。

「神父たちは私たちが守っている道を紹介しませう。神父たちは私たちが先祖から受け継いだこの道を教えてください¹¹。」

そのため、彼らにとって宣教師から教理を習う事は伝承の理解度をさらに深められることであった。長期にわたって、宗教者なしに先祖の伝承を守り続けたこれらの村民は、その意味の大部分を理解していないようだった。なぜ小齋を守らないといけないのか、祈りと祭日の意味は何かなど、かなり不明なものであった。逮捕された今村の村民は「宗法の深意」を学ぶために大浦天主堂に行ったことを役人に述べている¹²。

中世後期・近世初期の宣教師は仏教との混同を避けるため、ラテン・ポルトガル系の宗教用語を用いた。潜伏キリシタンはその用語の意味をよくわからなかったにもかかわらず、19世紀まで維持している。そして宣教師と接触した際、その用語について、宣教師に多く質問した。その意味を明らかにしたいという願いがあったようだ。

3.3. 宣教師と潜伏キリシタンの伝統用語

ラテン・ポルトガル系の用語はいうまでもなく異国からきたが、潜伏キリシタンはその用語の異国性はほとんど重要視していなく、先祖から受け継いだ、とても馴染んだ慣習のひとつとしてみていた。

宣教師は、早い段階で、ラテン・ポルトガル系の用語を引き換えるべきかどうかに関して考察した。潜伏キリシタンの日本人とまったく接触していなかった横浜にいた宣教師たちは、漢語を用いるべきだと主張していたのに対して、長崎地域の潜伏キリシタンを改宗させようとしていたプチジャンたちは伝統用語を維持すべきだと主張した。そして、前者は全ての日本人を対象とする教理書

を作成すべきだという考えのもと、1865年漢語を用いた教理書を作成した。この教理書を長崎の宣教師に送ったが、プチジャンはこの地域のカトリック・潜伏キリシタンへ配ることを拒否した。その理由は彼らのラテン・ポルトガル系の用語への愛着を知っていたため¹³。

プチジャンは伝統用語を用いない教理書を配ることで、彼らを困惑させてしまい、信頼を失うのを恐れたのである。そのため、1866年初期、プチジャンとロカインは潜伏キリシタンの村落に伝承されてきた書物・用語に従って教理書を作成した。狙いは潜伏キリシタンの信頼を得る事であった。

ラテン・ポルトガル系の用語はプチジャンの死去まで放棄されなかった。なぜなら、改宗の大部分はもとの潜伏キリシタンであったためだ。1890年前後、日本人カトリックの3分の2はもとの潜伏キリシタン、あるいはその子孫であった。最初に出版された『聖教初学要理』という教理書がとても興味深い一冊になっている。16・17世紀の再出版にはないが、伝統用語が用いられていて、ページの上部には異国の用語の説明が付いている。先ほど述べたように、多くの改宗者は宣教師に先祖信仰の意味・本来について様々な質問をしていた。この『聖教初学要理』の出版により、宣教師は「先祖信仰の専門家」としての地位が高くなった。

4. 幕府・明治政府の弾圧とカトリックの宗教意識の変化をめぐって

まとめると、カトリックとなった潜伏キリシタンは異国の用語を使い異国人の教理を学んでいても、それが「異国」のものだとは意識していないか、とても希薄である。先祖・村への愛着がとても顕著であるといえよう。彼らにとって、カトリック教会へ所属することは先祖信仰の本来の意味を見出すことなのである。しかし、為政者側からは、カトリックへの改宗は同様の認識ではなく、

逆に、改宗者と異国の脅威との関係を指摘している。カトリックは異国人の手先として見なされていたのである。1868年の体制の変革で、その傾向が顕著となっていく。その結果、宣教師の教理を学んでいたもとの潜伏キリシタンは徐々に信仰に対して意識を変え、自らの信仰は先祖から受け継いだもののみではなく、普遍的宗教でもあるという意識が強まっていったのではないかと私は考える。

4.1. 国内・国外の事情とカトリックの問題

浦上四番崩れの最初に、長崎奉行（徳永昌新）はカトリックの村民と異国人の脅威の関係をはっきりと指摘している¹⁴。1867年7月、60数人の村民が逮捕された。長崎奉行は逮捕の理由として「天草一揆」（島原の乱）と「朝鮮仏蘭西之戦争」（丙寅洋擾）という事件を提起した。丙寅洋擾とは1866年10月、フランスと朝鮮の間に発生した戦争である。その契機となったのはフランス人宣教師と韓国人カトリック信徒が処刑されたことだ。長崎奉行は浦上のカトリックがフランス軍の手先となるのを恐れていたのであろうか。朝鮮の場合のみでなく、フランス国家は1858年にも宣教師の処刑を口実として「インドシナ」の侵略を開始した。こうした背景を知っていた長崎奉行がキリスト教と西欧人の帝国主義とを結びつけることはけっして無根拠ではなかったのである。

4.2. 明治政府の宗教政策とカトリックの反応

とりわけ問題視されたのは教理上のことでなくカトリックの国法への違反である。体制の変革で、その態度は急変した。周知通りに、明治政府は神道・天皇を中心とする宗教イデオロギーをつくらうとしたのである。1868年以降、日本人は義務として神道の神々と天皇の神的先祖である天照大御神を崇拝すべきであった。明治元年の宣教師の報告にて、その変化がうかがえる。九州鎮撫総督であった沢宣嘉は1868年3月に20数人の浦上のカ

トリックを召喚した。目的はカトリックの意図を探ることと新体制の宗教方針の変わりをはっきりと伝える事であった。ロカインは沢宣嘉が述べた事をまとめて報告している。沢宣嘉が示した一つの論点は宣教師が日本の植民地化・侵略を企画しているフランス国家の手先であるという一般的なもので、二つ目は新しい論点で、明治政府のイデオロギー方針を端的に示して、天皇の先祖である神々への崇拝が強調されている。浦上の村民はカトリックとなることと異国の神を崇拝することで神々と天皇からもらう恵みを認めないことに値するという¹⁵。一ヶ月後、カトリックはまた召喚されている。そのとき、沢宣嘉はカトリックを売国奴（*traîtres à la nation*）だと言って非難し、大神宮・天照大御神と天皇の繋がりをより強く主張している¹⁶。

これに対して、カトリックはどう反応したのか。まず、法律への違反を正当化するため、神に与えられた十戒とその全能を強調した。いうまでもなく、神の全能はキリスト教系の神の特徴であるが、注目すべきはこの特徴を使って為政者とその掟・法度を相対化していることだ。カトリックは神の優越性を強く主張することで、將軍そしてその後天皇の宗教上の政策をとるのを拒否したのだ。浦上カトリックのリーダーである高木仙右衛門が1867年10月に長崎奉行の役人に述べたことがその例の一つである。

「天ちばんもつなきときより天主様がありまして、みなてんし、しやうぐん様もこの天主様がつくりますれば、天し、しやうぐん様より天主様がうへであるとわたくしおもいます¹⁷。」

明治政府の宗教政策に対して、カトリックは徐々に信仰の普遍性に重点を置いた。カトリックの神とは異国の神でなく、世界中を支配する神だと、配流先の浦上カトリックが頻繁に表明している¹⁸。

高木仙右衛門の覚書には津和野藩士との会話が載っている。藩士のカトリックが異国の手先であ

るという主張に対して、仙右衛門はデウスとは世界中の神であると答えている。

「いまなんじらハわがおやのてんし様にしたがわずに、いこくのをしへをしんじいこくの人にしたがうハなんぞや……〔高木仙右衛門答えて曰く〕これはいこくの人にしたがうことでありません。又いこくの人のためにしんじません。いこくのためにも日本のためにも、ただせかいちの御主をうやまいます。この御主はいづれのくにもはからいます¹⁹⁾」

カトリックはデウスを敬う理由は世界中を計らうからだけでなく、来世にて救済を与えられるという点をもっとも重要としている。ある明治政府の官僚が1869年9月に長崎地域でカトリックについて調査する中で、カトリック信徒と会い、その会話が報告にて記録されている。

「百姓ニ逢ヒ汝カトリツキ宗之徒ナル哉を尋ルニ敢テ恐るる色無クして然りと答ユ予曰汝等皇土工生れ此地ノ穀ヲ食て人ト成り今他邦ノ教法ヲ尊信スル日本ト仏蘭とは孰を尊トスル哉彼答テ曰日本ニ生れ穀を食て之恩は生活中僅ニ六七十年今仏教師ニ授カル所ノ恩死後ノ幾千年比較して知ル可シト答²⁰⁾」

結論として

本稿で、日本近世近代移行期の潜伏キリシタン・カトリックは自らの信仰とその起源をどう意識していたのかについて、いくつかの資料を紹介した。『天地始之事』の内容をみると、信仰の起源が日本にないという意識の中で、潜伏キリシタンのカトリックへの帰属をより簡単にしたのは先祖の慣習とカトリック教会の形態上の類似点であった。カトリックとなった潜伏キリシタンは異国の宗教を選択したとは思ってはならず、改宗という意識も薄かった。カトリックへ所属することは、潜伏キリシタンにとって先祖の本来の宗教にもどるに値していた。しかし、為政者からは、特

に明治以降、カトリックを異国の宗教を選んだ日本人としてみられていた。ほかの言葉でいうと、自国を裏切った日本人としてもみられていた。このような批難によりカトリックは徐々に自らの信仰をデウス・神の普遍性に重点を置くようになったのである。

注

- 1 潜伏キリシタンの移住とその多様性については、拙稿を参照「幕末・明治初期のキリシタン民衆社会の地域的構造についての一考察」（『日本史攷究』、36、2012年）。
- 2 Archives des Missions étrangères de Paris [以下AMEPと略す] vol.569, fol.1744-1757, 1866年7月22日。
- 3 AMEP, vol.569, fol.2077-2096, 1867年5月3日。『日本近代思想大系 5 宗教と国家』（岩波書店、1988年）287頁。
- 5 『日本庶民生活史料集成18 民間宗教』（三一書房、1972年）833頁。
- 6 同842頁。
- 7 「天地始之事」は『日本思想大系25 キリシタン書排耶書』（岩波書店、1970年、382～409頁）に収録。
- 8 AMEP, vol.569, fol.1325-1336, 1865年5月17日。
- 9 AMEP, vol.569, fol.1446-1554, 1865年9月17日。
- 10 『日本近代思想大系 5 宗教と国家』283頁。
- 11 AMEP, vol.569, fol.2077-2096, 1867年5月3日。
- 12 「邪宗門一件口書帳」（『久留米郷土史研究誌』6号、1977年）2頁。
- 13 AMEP, vol.569, fol. 1605-1612, 1866年3月26日。
- 14 浦上和三郎『浦上切支丹史』（全国書房、1943年）156頁。
- 15 AMEP, vol.569, fol.4198-4203, 1868年3月20日。
- 16 AMEP, vol.569, fol.4242-4247, 1868年5月10日。
- 17 高木慶子『高木仙右衛門覚書の研究』（中央出版社、1993年）62～63頁。
- 18 『耶蘇教二関スル書類』（長崎純心女子大学、1991年）144頁。
- 19 『高木仙右衛門覚書の研究』83～85頁。
- 20 『大日本外交文書 第二巻・第二冊』（日本国際協会、1938年）562頁。